

進路指導部通信

県立高等特別支援学校
進路指導部
2016.9.22 NO. 20

最近思うこと

進路指導部 鍋島隆一

神奈川県川崎市に日本理化学工業という、チョークを作っている会社があります（ちなみに本校で使用しているのもこの会社の製品です）。社員数は70人程度ということですが、びっくりするのは社員の7割超の方が知的障害者、更にもその半数の方が重度判定を受けておられるということです。

この会社が初めて知的障害者の方を雇用したのは1960年のことで今から56年も前のことです（それも2人）。当時は法定雇用率というものはなく（法制化されたのは雇用から約30年後の1987年）、障害者の方が学校に通うことすら「免除、猶予」の頃ですから（養護学校の義務化は1979年）、一般企業で「雇用する」などということは到底考えられないような時代ではなかったかと思います。

きっかけは本校で言うところの現場実習です。施設に入所する前にせめて2週間だけでも「会社」というものを体験させたいという、学校側のたっのお願いということで行われた実習だったようです。それがなぜ雇用にまでつながったのか？とてもよく仕事できたのか？必ずしもそうではなかったようです。「仕事ができる」ということよりも、ひたすら黙々と休憩のチャイムにも気づかないくらい夢中で働くその姿を見た従業員の方が「私達が面倒を見るから雇って」と人事担当者のところまで押しかけてきたことがきっかけとなったのです。内一人の方は定年（60歳）まで勤め上げられたとのこと。私も卒業生の職場訪問をしますが、企業の方にほめていただくのは「仕事ができる」ということよりも素直さとか、真面目さとかいう「働く姿勢」（人柄）であることの方が多く「本校の宝」であると考えており、ここに「障害者雇用の原点」を見た思いがしました。

しかし、「働く姿勢」だけでは仕事になりません。この会社の取り組みを見ていて印象的だったのは個人の目標設定や評価のシステムがとてもシビアでしっかりしており、障害があるからといって特別扱いはなく、どの方も「上のランクの仕事任せてもらえるよう、今自分に与えられた仕事を頑張る」と自分の仕事に社会人としての「自覚・誇り・責任」を持ち、向上心を持って取り組んでおられることです。

「働く姿勢」と社会人としての「自覚・責任・誇り」。直接関係はないようにも思えますが、車でいうならば両輪の関係にあると思います。残念ながら在学中の就職活動がうまくいかない、就職できてもうまくいかないのは人の言うことを素直に聞けなかったりする「働く姿勢」であつ

たり、目立たない地味な仕事を敬遠したりといった「社会人としての自覚と責任」であったりということが関係していると感じる時があります。前者については問題外ですが、後者については「職業観」というものについて疑問を感じることがあります。本校の卒業生の就労の現場というものはケーキ製造なら鉄板の焦げを落としたり、洗ったり、焼き上がった物をトレイに並べたり、ラインの仕事の一部と地味なものがほとんどです。なのに「専門性の高い仕事を！手に職を！！」ということで資格検定に取り組む向きもありますが方向性を誤ると逆効果になると思います。「手に職」というのは仕事を行う上で武器となるのは事実ですが、本校卒業生の就労実態からすると無理があります。あくまで「労働意識を高めるきっかけ」と捉えるべきだと考えています。

また「働くこと」＝「作業をすること」と捉える向きがあります。しかし長く働き続けるためには前号にもありました「働くための6カ条」の特に①～④の部分がどれだけ備わっているかが分かれ目になると思います。

2学期には1・2年生は現場実習、3年生は結合実習、そして進路セミナーと進路に関する行事が多くあります。こうした行事に取り組むことは大切なことですが、行事のみで終わるのでは意味がありません。大事なものは「普段の生活」です。普段の生活をしっかりとおくる中で進路関係の行事を通じ、より確実な力がつくものだと思っています。

お知らせ

西宮市障害者就労生活支援センター「アイビー」の方よりセミナー開催のご案内をいただきました。詳細下記のとおりです。事前申し込みが必要です。参加を希望される方は担任までお申し出下さい。10月7日（金）を締め切りとさせていただきます。

記

- | | |
|------|--|
| 1 日時 | 10月14日（金） 13:30～16:00 |
| 2 場所 | 西宮市勤労会館ホール（西宮市松原町2-37） |
| 3 内容 | 1部 講演「企業における障害者雇用の取り組み」 株式会社ロフト 西日本営業部
2部 パネルディスカッション「福祉事務所から一般就労へ」 |

